

[博士論文審査要旨]

申請者：堀 峰生

論文題目 「財閥の転向」と万代順四郎

審査員 橘川 武郎

米倉 誠一郎

清水 洋

本論文は、第 2 次世界大戦直前の時期の三井銀行およびその後身である帝国銀行のトップマネジメントをつとめた万代順四郎の足跡をあとづけ、その作業を通じて、「財閥の転向」がもつ歴史的意味の再評価をめざすとともに、「純内部昇進型専門経営者」の登場について光を当てようとしたものである。

本論文において筆者は、①ビジネス・エリートではなく、生え抜きであり現場畑のキャリアをもつ一般行員であった万代が、なぜ財閥系の名門三井銀行において、トップマネジメントに上り詰めることができたのか、②「財閥の転向」の時期に万代が三井銀行のトップマネジメントに就任したことは、いかなる意味をもったのか、③万代はどのような銀行経営を構想し、帝国銀行の成立に際していかなる役割をはたしたのか、という三つの問いをたてる。そして、それぞれ、①もはや「財閥の銀行」という位置づけだけでは立ち行かなくなった「財閥の転向」の時代の三井銀行にとって、現場での経験を通じて培われた「長期的な視点に立って企業を育成する」という万代の銀行経営観は、時宜に適っていた、②「財閥の銀行」から「より公共的な銀行」への三井銀行の転身を意味した、③万代はリレーションシップ・バンキングを構想し、その立場から帝国銀行の成立にも主導的な役割をはたした、という答えを導いている。

本論文の長所は、以下のとおりである。第 1 は、これまで、他の戦前期三井銀行のトップマネジメントである中上川彦次郎や池田正彬に比べて十分な検討がなされてこなかった万代順四郎を対象にして、初めて本格的な経営史的分析を行ったことである。第 2 は、「財閥の転向」の評価について、社会的批判をかわすための財閥による彌縫策という通説的見解に異を唱え、それが一定の公共性を有したとする新しい見方を示したことである。第 3 は、チャンドラーに端を発する「経営者企業」論に対して、「純内部昇進型専門経営者」の登場という論点を追加し、その内容を豊富化したことである。

とは言え本論文にも、指摘すべき問題点がある。第 1 は、データの十分な渉猟と厳正な処理が行き届いておらず、万代本人ないし周辺の人物がもたらす情報に依存するというバイアスがみられる点である。第 2 は、対抗仮説の検証が十分ではなく、その結果として、実証面での不十分性を免れえない点である。しかしながら、これらの問題点は本論文の長所を損なうものではなく、また筆者自身もそれらについて十分に認識しているため、筆者

の今後の研究により克服が可能である。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士（商学）の学位を受けるに値するものと判断する。